

鼎談書評

34

国が潤うほど苦しむ人々が増える矛盾の地

トム・バーシエス／山田美明訳

喰い尽くされるアフリカ

欧米の資源略奪システムを中国が乗っ取る日



集英社 1900円＋税

片山 イギリス人ジャーナリストの力作です。アフリカの天然資源の諸外国による収奪の構造。それを助けて「売国」に励むアフリカ諸国の腐敗した権力。著者は的確な情勢認識と綿密な取材で描き抜きます。あまりに絶望的内容です(笑)。

金属や石油。天然資源に恵まれたアフリカの未来は明るい。いずれはヨーロッパよりもアフリカが繁栄する。よくあった未来予測です。しかし本書を読むと、実態は暗黒化に向かう一方。資源による収入は一部特権階級に独占されている。また、資



やまうち まさよし
山内昌之
(歴史学者・明治大学特任教授)



かた やまもり ひで
片山杜秀
(政治学者・慶應義塾大学教授)

源獲得競争が熾烈さを加える中、やはり中国のやる事が凄まじい。あれだけの人口の国が産業発展を目指しているのだから資源は幾らあっても足りない。中国の天然資源ブローカーたちが暗黒大陸で暗躍しているのですよ。アフリカ諸国の独裁者たちと癒着しながら、資源を収奪し、利ざやを稼ぎまくっている。

本書によると、絶対貧困率の指標である一日一・二五ドル未満で暮らす貧困者の割合は、コンゴで八八%、ザンビアが七五%、ナイジェリアで六八%。ちなみに中国は一二%でメキシコは〇・七%です。アフリカの資源に世界の産業が支えられているというのに、アフリカの人民の圧倒的多数は極度の貧困に喘いでいるのです。驚くべき不公正です。

後藤 本書を支えているのは、筆者のフットワークの良さです。イギリス「フィナンシャル・タイムズ」紙のアフリカ調査報道特派員で、ネット時代の隠された情報を取得しつつ、現地を丹念に歩いている。大統領から裏通りの体制指導者まで、実に雑多な人々に会っている。取材蓄積の豊富さによって、アフリカの生々しい今が描き出されています。

片山 取材で訪れたナイジェリアで虐殺を目の当たりにして精神を病み、PTSDと診断されてもいるんですね。修羅場をくぐっています。

山内 アフリカと同様、資源で豊かな地域として中東アラブや湾岸諸国が挙げられます。サウジアラビアやイランもかなり墮落しています。が、アフリカほどひどくはない(笑)。

国は儲かり統治はでたらめ

今日のゲスト



ごとう まさはる
後藤正治
(ノンフィクション作家)

湾岸の王政国家では、巨額の石油収入は紆余曲折はあっても、国民へ再分配され学校や医療が無料になるなど、手厚い保護が受けられるシステムができており、一種の社会福祉国家として成立している。

片山 本書で告発されるアフリカの国々はそうではありません。資源による収入を特権階級が囲い込む。

それだけで莫大なので、国民からの徴税に不熱心。その分、国民に見返りを与える必要もない。資源を守る軍事力と警察力と採掘の労働力。他は要らない。日本が明治維新の際に教育に力を入れたような、国民国家形成のための努力など考えられていません。国が儲かれば儲かるほど、統治はでたためになつてゆく。

山内 アンゴラにはドイツの国土に匹敵する耕作地があるにも関わらず、スーパーに並ぶ八種類の豆の缶詰に自国製品はないのですね。コン

山内 恐ろしいのは、資源システムだけではなく政治システムまで中国に乗っ取られる日を予見させる点です。多くの部族が入り交じり民主主義が根付きづらいアフリカは、法の支配や人権といった意識も低く、中国人の政治や法の意識とびつたり重なる。かつて十六、十七世紀にヨ

なぜ祖国での評価が高いのか

西川賢

ビル・クリントン

停滞するアメリカをいかに建て直したか

後藤 先日友人のアメリカ人に評判のいい大統領は誰か尋ねたところ、「最近では、やっぱりクリントンだ」と言われたことがあります。私はどうも、モニカ・ルインスキーとのスキャンダルの方が印象的で(笑)、実績はよくわからない。「クリントンとは何者か」を知りたく思い、こ

ゴのキンシャサ郊外にはゼネラルモーターズが組立工場を運営していたが今は廃墟になっていきます。もはや社会構造がめちゃくちゃなのです。この構造に拍車をかけているのが中国です。ニジェールとナイジェリアとの国境では、中国の工場で作られた大量の繊維製品を積んだトラックが行列を作り、市場は中国製品に席巻されている。八〇年代半ばに百七十五あったナイジェリアの繊維工場は、いまや壊滅の危機に瀕しています。中国の罪業は深いですよ。

まるでスパイ映画

片山 ローカル産業だけでなく、資源の収奪システムまで、いまや中国の手に握られようとしています。本書に登場する徐京華という謎の人物は、アフリカの資源から膨大な収益をあげる多国籍企業を作り上げま

ロッパがアフリカを植民地化したときとはまったく質を異にするような、中国のネオ植民地化がアフリカで起こつても不思議ではありません。片山 先進諸国でも国民国家の枠組みは保ちにくくなっている。アフリカの有様が世界の未来を予告するものでないことを祈るばかりです。



中公新書
840円＋税

の本を手に取りました。概略がコンパクトにまとめられ読みやすかったですね。彼が大統領の座にいた九〇年代は、アメリカにとって内政の時代です。赤字に苦しむ財政を建て直

鼎談書評

した。七つの名前を持つというこの男はまるで正体がかめません。筆者は果敢に徐京華の携帯に電話をかけますが、一度目は食事中、二度目は会議中で取材はできない。

後藤 香港にある本社を訪ねても、知らぬ存ぜぬで追い払われてしまう。会社の実態があるようでない。略奪システムの視えない構造を物語っていますね。

片山 周辺に女が出てくるのも、まるでスパイ映画です(笑)。

山内 本の副題である「欧米の資源略奪システムを中国が乗っ取る日」のネーミングが秀逸です。アフリカを描いているようで、実は今の中国の国家体質がよくわかる。

後藤 いま中国のパワーは世界を席巻している。徐もまた、象徴的な歯車のひとつであって、肥大するアナーキーなエネルギーは共産党の制御をも超えているように思います。

し、退任時に二三六〇億ドルの財政黒字を達成した業績は確かに評価に値します。ほかにも銃規制を強め、無保険児童への医療制度を創るなど、現代のアメリカ社会に切実な改革をいくつか積み重ねてきた。

もうひとつの感想は、彼はとても運がいい人だと思えることです。テロの時代へと突入して行く「9・11」が起る二〇〇一年の一月に退任しているんですね。財政赤字の脱却は、いわゆる「ドットコム・バブル」にも助けられている。大統領に必要な要素はさまざまありますが、運というものも欠くことはできないのかもしれません。

片山 もうクリントンの評伝が出る時代になったんですね(笑)。時間が経つのは早い。クリントン政権は、冷戦構造が崩壊し、アメリカが大國として世界を支配し続けるという幻想をまだ抱くことができた時代

に重なります。その幻想は「9・11」で木っ端みじんに破壊されるわけですが、その点において、クリントンは「いい時代のいい大統領」だった。まさに、運がいい(笑)。アメリカ人が願う「強き善きアメリカ」の体面がまともに保っていた時代の最後の大統領がクリントンなのでしょう。

山内 クリントンが父ブッシュとジョージ・ブッシュと、最大のライバルと言われたロス・ペローを破った九二年の大統領選挙を、私は客員研究員として滞在していたハーバードで見っていました。三期にわたって政権から遠ざかっていた民主党が久しぶりに政権を奪回しそうだ、と教授陣はひじょうに盛り上がっていました。ジョセフ・ナイと「クリントンが政権を取ると、今後の中東政策はどうなるんだ？」と議論したところをよく覚えています。

ところが残念なことに、クリント

後藤 クリントンとスキヤンダルは、切っても切り離せません。アメリカのテレビ局が行なった調査によれば、財政再建や危機管理などの項目で高く評価されているものの、道徳的権威の評価はきわめて低い。在任時にこれほどブライベートな問題を問われた大統領は、クリントン以前にはいません。政治家たるもの、タフでないとやっていけないことを体現したとも言えます。以前、フランスのミッテラン大統領に愛人がいたことがわかったときの会見を思い出したりしました。

山内 ええ、子どもまでいて。記者に問われた答えが「エ・アロール? (それがどうした)」ですからね。

本にはクリントンのスキヤンダルを執拗に捜査するケネス・スター独立検察官も登場していますが、その執念は異様です。ルインスキーの電話を無断で録音し、スターに渡す知

んの中東政策はパツとしなかった。「9・11」の萌芽はクリントン時代に生まれています。九三年、ニューヨークの世界貿易センタービルが爆破され、六人が死亡。九八年にはケニアとタンザニアでアメリカ大使館が標的となり、二百五十七人が死亡。どちらもアルカイダが関与しています。バーガー国家安全保障問題担当補佐官が九七年頃に「テロは頭から離れない問題と化していた」と言うように、すでにテロの時代は始まっていた。ところがクリントンは、合衆国大統領として戦略的にどう対峙するのか明確なメッセージは発していない。暢気なのです。私でさえ帰国後すぐ『イスラムとアメリカ』という本を書いたのですがね(笑)。

オバマとの比較は?

片山 クリントンに対する評価の

人のリンダ・トリップという女性も相当に変わったお節介屋だ(笑)。ただ、クリントンは、あれほどの窮地に陥っても、必ず復活するのがすごいところで、「不適切な関係」を認めて国民に謝罪し、いまでも高

高さが既定路線になっている点は、やや気にかかります。たとえば冷戦構造崩壊から二〇〇一年という時代背景を丁寧に読み解くなど、もう少し違ったアプローチがあってもよかったです。民主党支持者を重視するあまり左傾化していた政策を見直し、「第三の道」として中道路線を選択したことを成功の要因とする点も違和感が残りますね。クリントンという素材はおもしろいので残念です。

山内 同じ中道路線なら、オバマと比較するような論点も欲しいところですが。本書はオバマを「クリントンほどの成果を達成することはなかった」と論じていますが、どちらが将来歴史の審判に耐えうるかは、微妙だと私は思うなあ。クリントンは逃げを打つのが得意だけれど、オバマはシリア難民を生み出した自分の非介入政策を含め、歴代政権の失策の責任を引き受けていますからね。

にじみ出る天皇・皇后両陛下のお人柄

川島裕

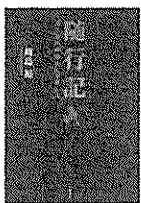
随記

天皇皇后両陛下にお供して

山内 二〇〇七年から一五年まで侍従長を務められた川島裕さんによる、天皇・皇后両陛下の旅の記録です。ヨーロッパ歴訪やサイパン・ペリリュー島の慰霊の旅、そして東日本大震災の被災地ご訪問など、行かれた先々で陛下がどのようにお考え

い評価を維持しています。学生時代の「兵役逃れ」批判やホワイト・ウオーター疑惑も乗り切っている。

片山 間もなく、妻・ヒラリーが大統領になるか結果が出ます。タフな夫婦の行く末が楽しみです。



文藝春秋
2500円+税

になり、何をおっしゃったのか、我々ではなかなか窺い知れない陛下の佇まいが自然に浮かび上がる、たいへん貴重な一冊になっています。

八月八日にあった「お言葉」で改めて天皇の在り方について考えた人も多いと思います。この本を通してわかるのは、最初から象徴天皇として地位に就かれた現天皇が、「象徴とは何なのか」を日夜模索してこら

鼎談書評

れたことです。天皇・皇后両陛下とも、よく「国民に寄り添って」とおっしゃられますが、これは単純に慰霊の旅や被災者たちのお見舞いに行かれる行為だけを示すのではないと本から浮かび上がってきます。ご自身が体験していない苦しみや悲しみを本当に共有できるのか、ひじょうに深く考えていらっしゃいます。

川島さんはそれを「氣」という言葉で表現し、「悲しみの『氣』を心の中に擁したまま、その後の生活を続けておられるものと思う。(中略)慣れるということの決して出来ない辛いお仕事を、それでも、そこに行つて、その人たちの側にあることをご自分方の役割としてなさっているように拝察している」と書いています。「氣」を介して、人々の苦しみや悲しみに同化する——、これこそが、両陛下の言われる「寄り添う」という意味だと思われまますね。天皇

は国事行為として定められた法的行為だけ果たせばよいと考える人もいますが、それでは国民に寄り添うことにはならないのです。

後藤 東日本大震災の被災地に何度も足を運んでおられる。私の乏しい体験でも、現地に入ると否応なく覚えるのは「何ができるのか」「自分は何者なのか」という問いです。天皇・皇后両陛下の発言から忖度して受け取れるのは、慰問も辛い役目ではあるが、「人々の傍に出向いて共にあることが自分たちの役割」と考えておられることです。感性において優しい人だと思えますね。天皇は少年期に戦争と敗戦を体験し、一般社会とは離れた環境下ではあれ、新しい価値観のもとで大きくなられた。

戦後の民主主義を大切に考えるリベラルな人であるように思えます。

片山 一九四五年までは現人神であり、ご聖断によって敗戦も決断さ

た、びつしりと詰まったご公務の間を縫うようにして行かれるのでほとんどの場合が日帰りです。先日のお言葉でも「全身全霊をもって象徴の務めを果たしていくことが難しくなる」とありましたが、現天皇は徹頭徹尾、手抜きのない方です。

後藤 平和への思いはたいへん強い。戦後六十年でサイパン、七十年でパラオをご訪問され、なかでもサイパンのバンザイ・クリフに向かつて両陛下が頭を下げられている追悼の姿からは、強い意志が伝わってくる。体験者が高齢になり、戦争の記憶が薄れて国が間違つた方向へ進んでいくことを危ぶむ発言を何度もされています。

山内 今年の終戦記念日のお言葉でも、「深い反省」という表現を昨

れた政治的な存在でもあった昭和天皇と違い、今上天皇はまさに「戦後民主主義の申し子」として生まれた天皇です。昭和天皇はいわゆる「人間宣言」で、天皇陛下と国民とは相互の信頼と敬愛によって結ばれた形で存在するとおっしゃいましたが、今上天皇は、国民の前になるべくお出ましになってコミュニケーションすることが象徴天皇のあるべき姿だと考えられているのだと思います。ただ存在するのではなく、できるだけ国民に寄り添い、「共感共苦」する。この本はその実践の記録としても読むことができます。

想像以上にハードな行程

山内 現天皇は今年で八十三歳を迎えられます。周囲にいる侍従長や宮内庁長官が七十歳を目途に退官されていくなか、天皇陛下だけは定年

年に続いて使われていました。たいへん重い言葉です。

一方で、現天皇はハゼの研究に熱心に取り組まれる学者なのです。だから物の考え方が自然で無理がないのです。川島さんは外務事務次官までなさった方ですが、陛下が欧米の学者と話されていると、聞いたこともない単語が飛び交うそうですよ。日本人の象徴天皇の口から、ラテン語の学名などがほんぽん発せられたのは誇らしくもあり、さぞ独特の感動を受けたことでしょう(笑)。

片山 今上天皇は、その姿かたちやお声からも、慎みがにじみ出て柔らかなく、対話的な物腰が身についておられると言いますか、まさに戦後民主主義の申し子という気が致します。本書に描かれる御様子からも、その一端を知ることができます。「お言葉」のあとでもあり、多くの人が何かを感じ取れる一冊だと思います。

がない。ないのが当然と考える人びともいます。私たちなら「今日は疲れたから早く帰ろう」なんて融通がききますが(笑)、陛下の場合はそうはいかない。現天皇が公務をなさる姿に慣れ、頼るあまりに陛下も人間だという当然の事実をついつい忘れがちです。御発言について考える際には、基本的人權やヒューマニティの観点も必要ではないでしょうか。

川島さんが「お年を召したご夫妻が短期間に続けてこれだけの長距離をクルマで旅されるケースは日本中探しても例を見ないのではないかと書いているように、その行程は想像以上にハードなのです。東日本大震災の被災地をお訪ねになると、両陛下は新幹線の最寄駅から海沿いまで片側一車線の一般道で長時間のドライブをなさるようです。安全上の問題から御料車も使えず、ミニバスに乗られたりもします。ま

鼎談書評